



榕樹(ガジュマル)の丘へ(安居 / Live at Peace)

2007(平成19)年11月7日鑑賞<シネ・ヌーヴォ>

監督＝胡炳榴 / 出演＝潘予 / 孫敏 / 白雪雲 / 王虹 / 孔憲珠 / 黃錦裳 / 李団 (東光徳間配給 / 1997年中国映画 / 100分)

……今年95歳となる新藤兼人監督も絶賛！ 老人問題、嫁姑問題、出稼ぎ問題は日中共通の問題だが、一人っ子政策は中国特有の問題。そんな問題山積の中、気難しいおばあさんも無垢な少女との心の触れ合いの中、少しずつ変化を……。腹の中に思っていることは1度は吐き出すべき。また、徹底的にケンカすることも悪くはない。しかし問題は、「雨降って、地固まる」かどうかということ。代表辞任騒動で揺れた民主党の行方に注目だが、安居街に住むおばあさんの場合は……？

舞台は広州の安居街、主人公は頑固なおばあさん

中国は広い。したがって、中国映画を観る場合は、まずその舞台を地図上で確認しておく必要がある。この映画の舞台は広東省の広州だ。私は広州については2004年6月の桂林・深圳・広州旅行で西漢南越王墓の見学だけ。深圳のすぐ近くにある広州は、改革開放政策によって大きく経済発展をとげた都市。したがって、その中心部は近代的なビルが林立しているが、この映画の舞台はそこから少し離れた安居街というまだ再開発されていない、昔ながらの街なみの残るまち。その一角に住む一人暮らしの気難しいおばあさん阿喜(潘予)がこの映画の主人公だ。映画の冒頭、何やら置き手紙を読んでうれしそうな表情の阿喜だが、それは一体なぜ……？

一人っ子政策の問題点が

運転しながらケータイをとったのは阿喜の一人息子東(孫敏)。助手席に座ってい

るのは妻の芳（王 虹）だ。東は独立して建築内装関係の仕事をしているようだが、何やら商売上のトラブルに巻き込まれているようで、大変そう。かかってきた電話は阿喜からで、お手伝いさんが辞めたことをうれしそうに（？）報告してきたもの。

一人暮らしさせている喘息持ちの母親が心配だからせめてお手伝いさんを、と考えた孝行息子の気持を阿喜は全然理解せず、今回辞めていった（クビにした？）お手伝いさんは3人目。今回は1カ月ももたず、4カ月の間に3人のお手伝いが辞めていったことになる。「お母さんも少しは我慢しなければ……」と息子がついお説教すると、阿喜からは「あのお手伝いは〇〇だ、△△だ」と悪口のオンパレード。

「俺だって仕事上のトラブルで頭がいっぱいなのに、そんなしょうもない苦情は聞いていられるか！」と私なら叫んでしまうところだが、そう言えないのが一人っ子政策で大切に育てられてきた一人息子。助手席に座る妻の芳も、そんな東にイライラが募っていることはミエミエだが、文句をいうわけにもいかないよう……。これでは先が思いやられること甚だしいが、ここにも一人っ子政策の問題点が……。

安居街の珊は夕日町三丁目の六子……？

『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）に登場する女の子が、就職列車に揺られて東北から集団就職で東京にやってきた、堀北真希演ずる六子。就職先の社長さんのお迎いはオンボロ三輪だったが、彼女は仕事にも家族にもなじみ、順調に成長……。

『榕樹（ガジュマル）の丘へ』で六子に相当するのが、魚屋のナンさんのところで働いている女の子珊（白雪雲）だ。彼女は、阿喜の亡夫ファーの田舎からさらに50キロメートルほど離れた白水鎮という田舎から出稼ぎに来ている健気な娘。珊の夢は早くお金を貯めて故郷へ戻り、食堂を開くこと。広州へ出稼ぎにきてから既に1年10カ月経つが、食堂開設資金はまだ3000元足りないらしい……？

どんな仕事でも頑張ってやり、早く1元でも多く稼ぎたいことを知っているナンは、阿喜の3人目のお手伝いが辞めたと聞き、そんな気だてのいい珊を4人目として推薦したが……？

おばあさんはうるさいが、おじいさんは……？

日本の昔話では、どちらかという、おばあさんは強欲でおじいさんは淡泊、おばあさんは悪玉でおじいさんは善玉というパターンが多い。それと同じようにこの映画

でも、お手伝いに文句を言うわ、一人息子やその嫁にも文句を言うわと、何かと不平不満が多いのが主人公のおばあさん^{アーシー}阿喜。それに対して魚屋のナンは自分の境遇を率直に受け入れる善良なおじいさんタイプで、不平不満を言うのは少なそう……。

ナンには息子が3人おり、妻の死亡後男子1つで3人の息子を育ててきたらしい。しかし今日、彼と一緒にカラオケを歌っていた^{アーシー}阿喜の目には、なぜかナンの表情は悲しそう……。そこで「どうしたの?」と尋ねると、何と仕事を継いでいる息子が嫁をとるようになったので、ナンは仕事を引退し老人ホームに入ると決まったらしい。^{アーシー}阿喜と違って、ナンはそんな自分の運命を率直に受け入れているところがエライ。そこで、この際思い切ってナンは^{アーシー}阿喜に対して「お前さんは人に対して厳しすぎる」とお説教をしたが……。

嫁姑関係も最悪!

出来がいい（と信じている）一人息子の母親と、その息子と結婚した嫁が仲良くできる確率は10パーセント以下……? これは私の勝手な推測だが、大きく狂っていることはないはず……。そんな嫁姑の面白い対立の一コマがこの映画で展開されるので、それをここで紹介しておきたい。

一人暮らしのおばあさんの楽しみはテレビの連ドラを観ること。これは、日本でも一時大流行していたヨン様主演の韓流ドラマ『冬ソナ』現象を思い出せば明らかだが、^{アーシー}阿喜にとっては連ドラの帰趨は何よりの一大事。ところが、今晚は間の悪いことにその放映中に停電となったから、電灯が消えただけではなくテレビもダメ。そこでわがままな^{アーシー}阿喜は息子に電話をかけ、「今から連ドラを観て、どんな結末になったか教えてくれ」と要求（お願い……?）。

折悪しく、この時東は妻^{トン}芳と共に仕事に疲れ果ててやっとわが家にたどり着いたところだったが、心やさしい東は母親を叱りつけることもなく「わかったヨ、母さん」と答えた。しかし身体は限界を超えていたようで、「今日は久しぶりにごぶさたしていた夫婦関係を……」と期待し、先にフロに入った^{ファン}芳がフロから上がると、東はケータイを手に持ったままソファーで熟睡状態。そんな中、さらに東のケータイが鳴ったから、さすがに^{ファン}芳はプツン状態でケータイをとり、「2人はどうなった?」と聞くおばあさんに対して「別れましたよ!」とケンもホロロの報告を……。

これはホンの一コマの風景だが、^{アーシー}阿喜と^{ファン}芳のやりとりをみていると、ホントに嫁姑

関係は大変！ もちろんこれは中国に限ったことではなく、日本でも全く同じ……？

新藤兼人監督も絶賛！

この映画は、1998年金鶏賞の最優秀作品賞、最優秀監督賞、最優秀助演女優賞の他、華表奨優秀作品賞、優秀監督賞、主演女優賞や、上海映画祭審査員特別賞、主演女優賞などたくさんの賞を受賞しているが、「中国映画の全貌2007」のチラシには「新藤兼人監督も絶賛。頑固な老人と、無垢な少女のふれ合いをさわやかに描いた感動作」と宣伝されている。

今年の夏95歳で『陸に上った軍艦』（07年）を公開した新藤兼人監督には、^{アーシー}阿喜はなお魅力的な女性と見えたのかもしれないし、頑固なおばあさんの心を開かせた無垢な少女^{シェン}珊はホントにかわいい孫（曾孫？）と思えたのだろう。そうでなければ「新藤兼人監督も絶賛！」とは書けないはず……。

テーマはよくある普遍的なものが……

この映画のテーマは、日本のホームドラマでよく取りあげられる老人問題、嫁姑問題、出稼ぎ問題などの普遍的なもの。しかし、そのエッセンスを100分の間に軽妙にまとめてタイムリーに提示し、最後には感動的なクライマックスにもっていく手法はやはり映画ならではのもの。

低製作費ながら「大催涙弾」と呼ばれて大ヒットした、内モンゴル出身の女性監督である^{ウーラン・ターナ}烏蘭塔娜の『幸せの絆』（03年）は、身寄りのない少女を引きとったおじいさんとその少女を中心とした家族の絆を感動的に描いた映画だったが、中国映画に低予算ながら（？）この手の感動作が多いのはなぜ……？ また韓国でも『おばあちゃんの家』（02年）という、都会育ちの孫と田舎に住むおばあさんとの心の触れ合いを描いた感動作がある（『シネマルーム6』284頁参照）のに、日本ではそういう感動作が少ないのはなぜ……？ それは、多くの日本人が、経済的豊かさとひきかえに心の豊かさを失ってしまったため……？

邦題の意味は、中盤になると明確に

この映画の原題は『安居』だが、邦題は『榕樹（ガジュマル）の丘へ』。ネット情報によれば、ガジュマル（榕樹）とは亜熱帯から熱帯に自生する常緑高木で、台風、

潮害などにも強い生命力あふれる樹。なお、ガジュマルというのは沖縄の地方名でもあるが、その由来はわからないとのこと。

「大きなガジュマルの木が3本あったはずだ」という阿喜^{アーシー}のセリフが登場するのは、映画の中盤、阿喜^{アーシー}が珊^{シャン}を連れて亡夫のお墓参りのために故郷へ戻った時のこと。駅に降り立ったものの、目印となるガジュマルの木が見えないから、一瞬阿喜^{アーシー}は焦ったよう。そこで、降りる駅をまちがえたのではないかと心配する珊^{シャン}がいろいろ尋ねて回ると、あのガジュマルの木は既に切りとられてしまったとのこと。お墓へ行く道順を教えてもらった珊^{シャン}は、阿喜^{アーシー}の手をひきながらおじいさんのお墓まで2人で歩いていったが……。この「ガジュマルの丘」に今も住んでいるのは、阿喜^{アーシー}の亡夫ファーの兄夫婦とその孫たちで、ここでも3人の息子たちは町に働きに出かけているとのこと。こんな過疎地はいずれ働き手が誰もいなくなり、廃村になる日が近いのかも……。そんな阿喜^{アーシー}の故郷での語らいの中、阿喜^{アーシー}はあらためて何を感じ、珊^{シャン}は何を感じとったのだろうか……。なお、ここで耳寄りな情報が1つ、珊^{シャン}の耳に。それは、ファーとの結婚を反対された阿喜^{アーシー}がファーと駆け落ちをしたらしい、ということ。こりやすごい！ こんな頑固なおばあさんに、そんなロマンティックな過去があったなんて……。さて、珊^{シャン}の彼氏のトンシャン^{トンシャン}は、珊^{シャン}と駆け落ちする勇氣はあるのだろうか……。是非1度聞いてみなければ……。

『ALWAYS 続・三丁目の夕日』の武雄がトンシャンだが……？

田舎から都会に出てきた若者同士仲がいいのは当然。『ALWAYS 続・三丁目の夕日』(07年)に新しく登場したキャラが、六子の恋人(?)で大失敗をやらかしてしまう武雄だったが、『榕樹(ガジュマル)の丘へ』でそれと同じような役割を果たすのがトンシャン……。しかし、バイクに乗って仕事をしているトンシャンは、ある日交通事故に遭って右手を複雑骨折したため、約半年の治療を要することになったから、当然(?)仕事もクビになることに……。さらに、阿喜^{アーシー}が留守の間に、珊^{シャン}がトンシャンを阿喜^{アーシー}の家の中に入れて食事をつくってやったことが、たまたま機嫌がムチャ悪い時の阿喜^{アーシー}にバレたから大変。その夜家に帰ってきた阿喜^{アーシー}の機嫌が悪かったのは、久しぶりに東と芳夫婦の家に芳の両親と阿喜^{アーシー}が集まって食事をした中でみんなの気持が行き違い、大ゲンカになったため。

お墓参りに2人で行って以来、阿喜^{アーシー}と珊^{シャン}の仲は急速に良くなっていたのに、自分の

留守中に珊シャンがそんなふしだらなこと(?)をしていたと知った阿喜アーシーはおかんむり。「調味料とガスは使わせてもらったが、肉と野菜は自分のお金で買ってきた」「おばあさんも2人の交際を勧めてくれたじゃない」「田舎へ帰るトンシャンにごちそうをいただけ」と必死に訴える珊シャンに対して、阿喜アーシーは「出て行ってくれ!」と叫んだから、こりゃ大変。さて、これから阿喜アーシーと珊シャンの仲はどうなるの……?

ホントに「雨降って、地固まる」となるの……?

11月4日早朝の小沢一郎による突然の民主党代表辞任の申入れから、7日の辞任撤回会見まで、民主党と日本国は大揺れに揺れることになった。これによって露呈したのは、小沢一郎という政治家の限界と民主党の能力、体力不足……? そういう見方が多い中、鳩山由紀夫幹事長らは「雨降って、地固まる」だ、と強弁しているが……? 目を転じてこの映画に話を戻せば、珊シャンとの大ゲンカの翌朝目を覚ました阿喜アーシーは、昼になっても珊シャンが家にこないため次第に心配に……。そりゃ、昨日の晩あれだけ大ゲンカをした挙げ句、「出て行ってくれ!」と言われたら、珊シャンが2度と戻ってこれないのは当然。ところが、この映画ではその後の脚本がしっかりしているから、結果的に「雨降って、地固まる」ことに……。そんな結果に至るまでのやりとりの面白さや、「ある事件」の発生は映画を観てのお楽しみだが、民主党はこの阿喜アーシーと珊シャンの仲のように「雨降って、地固まる」のだろうか……?

おばあさんは意外とお金持ち……?

この映画は面白いストーリーがいっぱい詰まっているのでつい長々と書いてきたが、ラストに向かっていく中、この映画には2つのクライマックスが登場する。その1つは、阿喜アーシーが老人ホームに入るのか否かということだが、もし阿喜アーシーが老人ホームに入れば、珊シャンのお手伝いの仕事もなくなってしまうのは当然。

あの大ゲンカの翌日、やむなく自分で買い物かごを持って買い出しに出かけた阿喜アーシーは、魚屋の前で珊シャンから魚を買うについて、「それは大きすぎる! それは小さすぎる!」となお文句ばかり……。そこで珊シャンから「おばあさんは、ここでも私の仕事を奪うつもりなの……?」と言われると、さすがにショックが大きかったようだし、何かを反省した様子。さらに一足先に老人ホームに入っていたナンを訪れ、ナンから「お前さんは幸せ者だよ」という話をタップリと聞かされた(説教された?) 阿喜アーシーはさら

に反省しよう……。

他方、自分が家に行かなかったばかりに、おばあさんが倒れてしまったと自分を責めていた珊は、「私はもう田舎には戻らない」「ずっとおばあさんの世話をする」と何とも健気な決意を。さあ、このように次第に「雨降って、地固まる」状態になってく中、おばあさんの質問は、「自分で食堂を開くのに、あといくら貯めなければならぬの？」という全然話の脈絡に沿わないもの。それに対して珊は何気なく、「あと3000元」と答えたが、そこで阿喜がとった行動は……？

小銭を貯めこんでいるおばあさんは意外と金持ちだなと思うとともに、あっと驚く感動的なシーンに思わず涙が……。これが第1のクライマックス。

老人ホーム行きの決断は……？

第1のクライマックスは都市と地方の格差問題、出稼ぎ問題がテーマだが、第2のクライマックスのテーマはまさに老人問題。具体的には、共働きで忙しい若夫婦は老人の世話までとてもできないため、息子夫婦と一緒に生活したいと願う母親の気持を無視して老人ホームに入れざるをえないという状況を、どうみるかという問題。

独立して商売を頑張っていた東と芳夫婦だったが、事業はどうにも好転しない様子。そこで2人が下した苦渋の決断は広州から汕頭へ行ってやり直すこと。そうなる
と、阿喜を一人暮らしのまま安居街においておくわけにはいかないので、必然的に老人ホームへ入れざるをえないことに……。

今お店のテーブルをはさんで向かいあっているのは、東と芳夫婦と阿喜の3人。恐る恐る話を切り出し、老人ホームへの入所申込書へのサインを求める東と芳だったが、今日はなぜか阿喜は上機嫌。そのうえ、いともあっさりと阿喜は老人ホーム行きをオーケーしたばかりか、「既に用紙に記入しているから、あとはお前たち夫婦にサインしてもらえばいい」という意外な言葉が……。これは一体ナニ……？ なぜ、阿喜はこんな風に態度が豹変したの……？

こんな阿喜の気持の動きは、この映画をじっくりと鑑賞していたあなたならすぐわかるはず。こんな温かい気持になる第2のクライマックスをみると、やはり人間っていいものかと思えるし、映画っていいものかと思えるはず。今日もわざわざ地下鉄に乗って、シネ・ヌーヴォまでやってきた甲斐があったというものだ……。

2007(平成19)年11月8日記